沖縄、徳之島および宇和島の闘牛に関する比較研究

西村 明・桑原 季雄・尾崎 孝宏
鹿児島大学法文学部

Comparative Studies of Bullfights in Okinawa, Tokunoshima, and Uwajima

NISHIMURA Akira, KUWAHARA Sueo, OZAKI Takahiro
Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University.

要旨

本稿は、鹿児島大学多島圏研究センターの共同研究プロジェクトである「新・道の島々プロジェクト」(1) の一環として行われている人文・社会分野研究「東アジア沿海地域における闘牛をめぐるネットワーク形成の現状」（以下「闘牛プロジェクト」と表記）の初年度における研究成果の一部である。

「道の島々」の一つである徳之島は闘牛の島として知られるが、徳之島に限らず日本各地に点在する闘牛は既にいくつかの分野で研究対象となっている。2004年 10 月の新潟県中越地震で被災した牛が徳之島に避難して現地の闘牛大会に参加したという事実 (2) からもわかるように、闘牛の主催者団体・参加者・牛のいずれのレベルにおいても個別地点の範囲を超えた広域的なネットワークを形成しており、この網の目の中を人・牛・情報が往来していることが予測されるが、こうしたネットワークに関する分析は、これまで等閑視されてきた。

そこで「闘牛プロジェクト」では、闘牛という文化イベントに着目し、闘牛を媒介にしたネットワーク形成の現状分析から、東シナ海を中心に日本海・太平洋の一部も含む東アジア沿海地域における、文化イベントを焦点とした地域間交流の可能性を提示することを目標とする (3)。その中で、本年度は南西諸島の闘牛の二大中心地である沖縄・徳之島と、比較対照としての宇和島、仔牛の供給地である八重山の 4 地点での現地調査を行った。沖縄における予備調査には、尾崎と西村が参加し、2005 年 9 月 11 日に沖縄市営闘牛場で開催された闘牛大会を調査した。宇和島と徳之島の闘牛大会の調査は、ともに 2005 年 10 月 23 日と開催日が重なったため、尾崎と桑原が徳之島で、西村が宇和島で開催される闘牛大会を分担して調査した。八重山調査は、2006 年 1 月 14 日～16 日の 3 日間、石垣島と

黒島の 2 箇所で尾崎、西村、桑原の 3 人で共同して行った。沖縄、宇和島、徳之島の闘牛に関しては、すでに詳しい予備調査報告を発表したので［尾崎・桑原・西村 2006］、本稿では沖縄、宇和島、徳之島の 3 つの地域における闘牛大会を比較して、若干の考察を加えたい。なお、八重山に関しては、闘牛開催地というよりは闘牛牛の生産地あるいは供給地であることから、本稿の比較研究では取り上げず、別稿で詳しい調査報告を準備する予定である。

次に、闘牛に関する先行研究については、尾崎が上記の予備調査報告書で詳述しているので、本稿ではごく簡単な紹介に留めたい。闘牛研究に関しては、徳之島と宇和島の闘牛に関する研究が他の地域よりも数的に多く、比較的研究が進んでいるが、徳之島は民俗学者とジャーナリストの独壇場であるのに対し、宇和島は民俗学に加え人類学や地理学など研究者の専門分野の幅が広いのが特徴である。これらの研究は総じて、ある行事を通じて地域共同体を浮かび上がらせるという傾向が強く、「闘牛プロジェクト」が目指す主催者団体・参加者・牛が形成する広域的なネットワークの調査研究は、これまでほとんど着手されていない。

以下では、本論の比較の前提として、まず、昨年、沖縄、宇和島、徳之島の 3 つの地域で開催された闘牛大会に関する調査資料を紹介し、その上で考察を進めたい。ただし、調査の詳しい内容は、上記のように、調査報告書にまとめて発表してあるので、ここでは、本論で展開する比較考察に必要な事実の記述に留めることにしたい。

Abstract

This study focuses on the bullfight as a cultural event, and aims to show the possibility of regional cultural exchange in East Asia through bullfighting in Okinawa, Tokunoshima in Kagoshima Prefecture, and Uwajima in Ehime Prefecture.

Though the bullfight existed in isolation in each region in the past, this study shows that actually the above three regions are connected dynamically with each other through the exchange of men, bulls and information about bullfighting. Furthermore we show that there exists a culture of bullfighting.

Today in Japan, the bullfight is seen mainly in rural areas such as remote islands, isolated districts and farming villages, which are often characterized as backward and peripheral regions. However people in these regions today are very active in exchange of men, cattle, and information with each other, and even organize an ‘international bullfight summit’ every year. This phenomenon cannot be understood within a simple dichotomy of center-periphery or advanced urban against backward country. Rather it is an example of regional cultural interaction in the information age.

Keywords: Okinawa, Tokunoshima, Uwajima, bullfight culture, regional exchange.

沖縄の闘牛大会

2005年9月11日（日）、沖縄市営闘牛場で胡屋闘牛組合と琉球新報社が共催して闘牛大会が開催された。沖縄本島は、毎週のようにどこかで闘牛大会がおこなわれていると言えるほど、闘牛が盛んな場所である。2005年には、年間34の大会が組まれていた。

闘牛場の入口には入場受付のテントが設営され、3千円で入場券を購入すると、当日の取り組み表と、そのほかに予定されている闘牛大会の予告取り組み表が手渡される。入口付近にはほかに飲食物やビデオ販売の出店もあった。会場に入ると試合開始まで、場内放送で徳之島闘牛のことを唄った「ワイド節」が繰り返し流れて、雰囲気を盛り上げていた。

会場は、直径およそ20メートルの土俵の周りを1mほどの高さの土手が囲み、土手の上には鉄パイプ製の柵が設けられている。柵から外は客席部分となり、階段状のコンクリート作りの椅子席が14段の高さまであって、土俵をぐるりと取り囲む。沖縄市営闘牛場は最大で4千人収容でき、大会当日は、中高年層の男性を中心としながらも、若い女性グループやカップル、小学生などもおり、米軍の沖縄基地関係者と思われる数人の欧米人男女の姿も見られた。

闘牛場の入場口の向かい側には本部席が設けられていて、関係者と司会進行役が座る。また、大型のビデオカメラが２台、それぞれ客席最前列の別角度に陣取り、土俵の様子を狙っている。客席の外側には、ナイター設備も4基設置してある。比較的涼しい9月末から6月頃までは正午あるいは午後1時に開始され、日差しのきつい夏場は午後4時や6時といった遅い時間に開始される。会場の外には、出番を待機する牛のための細長い牛舎が設けられているが、一頭ずつ壁で仕切られており、前面の壁にはそれぞれの牛の名前を書いた紙が貼られている。

開始5分前には、牛の準備を呼びかけるアナウンスがあり、牛主の名前や牛の体重、出身地、戦歴などの情報が会場に伝えられる。時間になるとそれぞれの牛が4～5名の勢子とともに入場口から順番に入場する。取り組みを行う牛は尾の先に紅と白のはちまきを巻いて識別を行う。牛には鼻ひもが通されているが、牛同士が頭を合わせて勝負が始まると、すばやくはずされる。

取り組み中、勢子はそれぞれの側から1人ずつ牛の左側に立ち、声と右手のしぐさで牛に指示を出す。攻めを促すときには、掛け声を張り上げつつ、牛の顔の近くで右手を下から上に激しく動かし、右足で地面を何度も踏み鳴らす。勝利し

た牛の角には、勢子が自分のタオルなどをくくりつける。また、背中には、本部席から手渡された化粧まわしが掛けられる。中には、子供を牛の背中に乗せて勝どきをあげている風景も見られた。

試合の合間に本部席から場内放送で、金品の寄贈者名が告げられる。横綱戦の「優勝」のほかに、勝者の中から特別に与えられる賞には、「殊勲賞」「敢闘賞」「技能賞」「特別賞」があった。翌日付の『琉球新報』と『沖縄タイムス』の朝刊の「市町村」面には、大会の結果が写真と星取表入りで大きく掲載されていた。横綱戦の勝利牛に掛けられる化粧まわしにも大きく「優勝 琉球新報社」と書かれており、地元新聞が、沖縄本島地域の闘牛大会の開催を支えていることがうかがえる。

取り組み表に牛の産地が明記されていて、1トンを超えるような横綱クラスの大型牛は、岩手産が目立っていた。あとは、全体に徳之島産の牛の比率が多く、沖縄本島産・与那国産は1頭ずつであったが、これは必ずしも沖縄闘牛全体の傾向ではない。さらに、特徴的なこととしては、徳之島の勝利牛を沖縄にトレードしてきた例が多く見られた。ここから徳之島と沖縄とのあいだには頻繁な交流があることがうかがえる。

宇和島の闘牛大会

「宇和島闘牛大会 秋場所定期大会」(主催:宇和島市観光協会、主管:宇和島闘牛運営委員会)は、2005 年 10 月 23 日(日)の正午から丸山公園内の宇和島市営闘牛場で開催された。宇和島駅からはシャトルバスが観光客をピストン輸送していた。会場は 16 角形のドーム型で雨天でも開催できるようになっている。窓口で販売しているチケットは 3 千円で、中にはいると、場内は「宇和島音頭」が流れていた。すり鉢状の場内の中心に土俵があり、その周りを鉄製の柵が囲むスタイルは、徳之島や沖縄と同じだが、柵の横棒は竹でできており(竹矢来)、牛を傷めないための配慮であるという。また牛の入場口は左右 2 箇所にあり、対戦する牛が双方から入ってくるようになっているのは、徳之島や沖縄の闘牛場とは異なっていた。土俵と客席のあいだには、カメラマン専用の幅約 2 メートルの空間が設けられていた。沖縄同様、会場の外に牛舎が設置されているが、こちらは仕切りの壁はなく、出場を待機する牛は一定の間隔をおいてつながれていた。

客席は、土俵を取り囲む階段状の座席が 9 段設置され、1800 人から最大で 3000 人まで収容可能となっている。客層は 60 代以上の男性が中心で、6〜7 割を占めるが、同年代の女性の姿や小学生前後の子供連れの家族、10 代から 20 代の若者のグループ・カップルなども見られた。大方は複数のグループ客、あるいは顔見

知り同士が合流した集団であった。会場内の一角は近くの小学校のための予約席となっており、小学生と保護者が見学していた。

正午になると取り組みに先立って、観光協会の代表として市長が挨拶し、続いて運営委員会の会長の挨拶があった。市長の挨拶では、小学生たちに向かって、若いうちから闘牛に慣れ親しみ、将来の闘牛文化の担い手になるよう呼びかけていた。

呼び出しの後、牛が入場してくる際には、進軍ラッパ・太鼓・指笛などの鳴り物が使われていたが、これは、徳之島や沖縄から牛を購入することによって、売主関係者が応援にくるようになったためだという。取り組みと取り組みの合間にチャンピオン牛の「土俵入り」を行うのも、宇和島闘牛の特徴のひとつである。牛は豪奢な化粧まわしや紅白の帯をつけて土俵内を竹矢来にそって練り歩く。その際、優勝旗や幟旗をもった人々が随行する場合もある。沖縄同様、取り組みを行う牛には尾の付け根のところに紅と白の短いはちまきを巻いて識別が行われている。しかし、観光化される以前は、その場所にお守りをくくりつけていたという。

牛の角に関していえば、宇和島の場合、上向きの角が好まれ、そのような形にするために仔牛のころから「角作り」が行われた。しかし、奄美・沖縄から来る牛は、ほとんど角の矯正がされておらず、角が横を向いており、横から敵の牛の耳の後ろを攻めるため、対戦の仕方や勢子のスタイルにまで変化をもたらしている。

また、闘牛大会の牛紹介のアナウンスによれば、沖縄（本島・八重山）産や徳之島産の牛が多く認められたが、中には隠岐産の牛も存在した。

徳之島の闘牛大会

徳之島では毎年 1 月、5 月、10 月に横綱を決める「全島一優勝旗争奪戦」闘牛大会が開催される。今年は、2005 年 10 月 22 日と 23 日の両日に前夜祭と全島一を決める 2 つの闘牛大会がそれぞれ伊仙町と天城町で開催された。横綱決定戦ともいえる重要な大会のためか、ときおり道路沿いの屋敷の門前には、全島一闘牛大会の出場牛の幟が立っているのが見えた。また闘牛大会の案内を流しながら通り過ぎる宣伝カーも見られ、雰囲気を盛り上げていた。

伊仙町も天城町も、闘牛場の入り口前の受付のテントで 3000 円の入場券と対戦表が印刷された一枚のカラープログラムを受け取り、一つしかない正面の入り口から闘牛場の中へ入った。直径 20 メートルほどの土俵を鉄柵が取り囲み、その外側にすり鉢状に階段席が取り巻く。開始時間は、伊仙町が午後 6 時で、天城

町が午前 10 時と異なったが、場内はお馴染みの島唄「ワイド節」の音楽が流れる。客層は中年以上の男連れが一番多く目に付いたが、小さな子から高校生あたりまでの子供たちや女性も多く見受けられた。観客のほとんどは地元民であることがわかる。ただし、天城町の全島一決定戦には奄美大島からのツアー客の一行も観戦していたことが、場内アナウンスでわかった。

試合が始まると、闘牛が一頭ずつ花道からワイド、ワイドの囃子と太鼓に先導されて入場する。普通、取組は 10 戦あり、東西に分かれて番付の低い方から順に、封切り、若手特番、花形、特番、小結、特番、関脇、大関、横綱（優勝旗争奪戦）の順で戦われる。自ら牛主でもある伊仙町の男性によれば、徳之島の牛の多くは八重山牛とのことであった。

試合開始前に、土俵中央で、塩と焼酎で土俵を浄める簡単な儀式が行われる。試合開始後の儀礼としては、対戦の合間には通例、主催者代表による挨拶がある。とりわけ全島一大会ともなると、対戦の途中、場内アナウンスで、地元出身の衆議院議員からの祝電の披露やスポンサーのレストランの宣伝やスポーツクラブの案内のほか、優勝旗の返納の儀式では、徳之島闘牛連合会長の挨拶や、ついでに地元出身のプロボクサーの紹介なども行われた。また、名瀬市からの闘牛ツアーの一行に対する感謝のアナウンスもなされた。さらに伊仙町の闘牛大会に特徴的だったのは、場内アナウンスで、徳之島警察署よりのお願いとして、闘牛賭博をしないようにとの放送が２度繰り返されたことだった。

全島一の大会の審判団は 3 町から 1 人ずつ 3 名があたり、白旗を挙げて勝敗を判定する。対戦中、場内アナウンスは、およそ 2 分おきに経過時間を告げる。その間は、勢子の「エイサー」の声と土を踏みならす音だけが響く。勢子は 3 人ずつと決められており、東西に分かれて赤と白のハッピを着けることになっているが、3 人の勢子が短時間で頻繁に交代することが多かった。茶髪の若い勢子の姿も多く目についた。勝敗が決着すると、牛の持ち主とその家族や関係者が土俵になだれ込んできて、ワイド、ワイドの掛け声とともに牛の背に飛び乗って手舞い足舞いで喜びを表現するのが毎回みられた。

勝負がつかない場合は、実況アナウンサーは観客に、引き分けにしていいかどうかを拍手でもって問う場面やじゃんけんで決める場面も見られた。大会の開始から終了まで要する時間は、伊仙町の大会では、約 2 時間 20 分で、また、天城町の大会では、最後の横綱戦が終了し、主催者側からすぐに優勝旗とトロフィーが牛主に手渡され、すべてが終了したのは開始から 3 時間 20 分後であった。観客は最後の勝敗が決まると同時にすばやく席を立って、あっという間に闘牛場から姿を消した。

伊仙町の大会も天城町の大会もそれぞれの町の闘牛協会主催のもと、徳之島闘

牛連合会の後援を受けて開催された。地元『南海日日新聞』でも、前日の第 3 面に、徳之島の闘牛大会の主だった取り組みについての詳しい解説が牛のカラー写真とともに掲載された。

伊仙町の大会の 10 組 20 頭の出場牛のうち、牛主の出身地別で見れば、天城町 1 頭、徳之島町 6 頭、伊仙町 7 頭、その他、鹿児島 2 頭、沖縄、名瀬、大阪が各 1 頭となっている。また、元沖縄で戦っていた闘牛が 4 頭参加している。さらに、牛主が団体名を名乗っている牛も 5 頭みられた。また、天城町の大会の出場牛 9 組 18 頭も牛主の地区別に見れば、徳之島町から 5 頭、天城町から 4 頭、伊仙町から 8 頭、沖縄から 1 頭の参加である。しかし、徳之島の闘牛大会では、闘牛牛の産地やその後のトレード暦について、詳しい情報は対戦表が掲載されたプログラムにも、そしてまた、場内アナウンスでも示されなかった。

比較考察

闘牛の観光化

徳之島には合わせて 13 ケ所の闘牛場があり、年 20 回ほどの大会が開催されている。全島一の横綱を決める大きな大会は年 3 回、しかも徳之島町、天城町、伊仙町の 3 町持ち回りで、午前中から開催されるが、その他の闘牛大会の興行は、誰でも開催可能である。徳之島の闘牛は、県や町などの行政の援助も無く、また無形文化財でも無く、闘牛好きな有志たちの活動だけで成りたっている。一方、沖縄本島では、徳之島以上に闘牛が盛んで、2005 年は年間 34 回もの大会が組まれている。主催者が闘牛組合、共催が琉球新報社、後援が沖縄タイムス社となっていることが多い。地元新聞が、沖縄本島地域の闘牛大会の開催を支えている。さらに、宇和島の闘牛大会は、秋場所定期大会で、主催が宇和島市観光協会、主管が宇和島闘牛運営委員会となっていて、会場も宇和島市の市営闘牛場である。宇和島では秋場所も含め、年に 5 回の定期闘牛大会が開催されている。

このように、主催者でみると、徳之島では各町の闘牛協会主催のもと、徳之島闘牛連合会が後援し、また、沖縄でも闘牛組合が主催し、地元新聞が共催となって支援しているのに対し、宇和島では、市の観光協会が主催し、宇和島闘牛運営委員会が主管となっていることや、市が闘牛場を運営し、闘牛大会で市長の挨拶があることなどから、宇和島では、市が闘牛大会を明確に観光の目玉と位置づけて支援し、観光化を促進していることがわかる。沖縄も観光客をあてこんで闘牛大会を頻繁に開催しているが、宇和島ほど行政が全面に出てきてはいない。これに反して、徳之島の闘牛大会は前 2 者と比較して、最も観光化が進んでおらず、また観光化にそれほど力を入れているようにも見えない。むしろ、徳之島では、主催目的が同窓生の記念行事や厄払い行事として開催する大会も多く、正月、ゴ

ールデンウィーク、お盆などの帰省客が多く島に帰るときは、連日どこかで大会が催され、観光客よりも帰省客に楽しんでもらおうという雰囲気がある。また、闘牛牛に牛主の名前や会社名、グループ名をつけることが多いことから、仲間で牛を持ち、連帯感を強め、喜びを分ち合っているようにも見える。

さらに、徳之島では、闘牛大会が島の経済構造や生活のリズムと深く関係している点が大きな特徴として指摘できる。即ち、徳之島の主たる生業はサトウキビの生産であり、正月休みを除くと、サトウキビの伐採が始まる 12 月から製糖期間が終了する 4 月末までが闘牛のオフシーズンとなり、それに合わせるように 5 月には早速闘牛大会が開催され、労働の疲れを慰撫するかのような社会的機能が見られる。闘牛が中心軸となって年中行事などのリズムが枠つけられていくというように、闘牛が人々の経済・社会活動を活性化しているともいえる［山田 2004：215］。

このように、徳之島の闘牛において観光化にそれほど力を入れていないように見えるのは、大都市圏に近い宇和島やマスツーリズムが定着している沖縄と違って観光客の集客力が極めて小さいため、島民の生計が観光ではなく農業を基盤としており、ゆえに、闘牛にはむしろ社会的成功、娯楽、賭博といった要素が強いからであろう。とりわけ、場内アナウンスで、徳之島警察署よりのお願いとして、闘牛賭博をしないようにとの放送が 2 度繰り返されたことからもわかるように、闘牛が賭け事の手段となっている点も、沖縄や宇和島ではみられない大きな特徴である。

さらに、徳之島の人にとって闘牛牛を所有することは祖先崇拝、家、一族の宝、家の繁栄の象徴であるといった意味づけがなされることもある［小林 1997；山田 2004：215］。即ち、牛の勝利が祖先を慰め、子孫の繁栄を約束するとされるため、牛の勝敗に固執し、とりわけ、全島一（横綱）の闘牛牛を育て上げるのが牛主の夢で、最終的には闘牛は「ランク」の頂点を目指しておこなわれるゲームである。そして、その牛のランクもまた持ち主に転嫁されている。こうして闘牛は徳之島というやや自己完結的な社会の中で、非常に重要な社会的機能を担ってきたのである。

観光化の度合いは、闘牛場の造りや観客の収容能力にも見てとれる。観光化が進んでいる宇和島と沖縄では闘牛場がドームになっていて全天候型になっている。とりわけ宇和島の会場は 16 角形のドーム型で雨天でも開催でき、収容人数も、沖縄と宇和島ではそれぞれ、3 千人から 4 千人収容可能ということで、これも観光客を当て込んでのものであるのに対して、徳之島の闘牛場は、収容能力が宇和島や沖縄のほぼ半分である。また、宇和島では、客席と土俵との間に、カメラマン用の特別席として幅約 2m の空間が設けられていたのも観光の宣伝に配慮

してのものかと思われる。

常夏の沖縄では、客席の外側には、ナイター設備があり、9 月末から 6 月頃までの比較的涼しい期間は正午あるいは 13 時に開始し、夏場の暑い時期は 16 時や 18 時といった遅い時間にずらしているのが特徴的である。他方、同じ常夏に近い気候の徳之島では、年 3 回の全島一大会は、午前 10 時開催ということからも、朝早くから出かけてきて、しかも屋根のない会場で強い日差しにさらされて観戦しなければならない観光客の便宜を考慮しているとは言い難く、島民による島民の楽しみのための闘牛という趣向が強く感じ取れる。

地域間の相互交流

すでに見てきたように、各地域とも、闘牛大会開催の形態がほぼ共通している。即ち、入り口のテントの設営やすり鉢状の階段席、飲食店やビデオ販売店などの出店など、会場の形態もほぼ共通するが、宇和島の場合、牛の入場口が 2 箇所あるのが、他の 2 地域と異なる。また、どの地域でも、3 千円の入場券と対戦表（プログラム）が手渡される点は共通である。また、沖縄と徳之島では同じ島唄「ワイド節」の音楽が流れるのに対して、宇和島では自前の音楽「宇和島音頭」が準備されている。こうした共通性は、闘牛関係者の相互交流や相互の往来によって、当然、もたらされてきたものと思われる。

さらに、宇和島では、取り組みと取り組みの合間にチャンピオン牛の「土俵入り」を行うのは、沖縄や徳之島では見られず、宇和島闘牛の特徴のひとつといえるが、牛の入場と同様の鳴り物が使われるようになったのは近年の傾向であるという。とりわけ、牛が入場してくる際には、進軍ラッパや太鼓、指笛などの鳴り物が使われるようになったのは、徳之島や沖縄から牛を購入することによって、売主関係者が応援にくるようになったためとされ、特に徳之島の闘牛の影響が濃厚といえる。

これら 3 地域の交流の形跡は、牛の角の変化と勢子の構えとの関係にも見てとれる。上述のように、牛の角は、宇和島の場合、上向きのものが好まれ、戦法も、角どうしを合わせ相手の額を傷めるのが主流である。そのような形にするために仔牛のころから「角作り」を行う。かつて宇和島に仔牛を出荷していた大分でも角の矯正は行われていた。他方、奄美・沖縄から来る牛は、ほとんど角作りがされておらず、角が横を向いており、横から敵の牛の耳の後ろを攻める。

この角の形の変化は、勢子のスタイルの変化も招いている。宇和島の勢子の構え方、牛に対する介助の仕方に大きく 2 つのパターンがある。ひとつは、沖縄や徳之島とまったく同じで、牛から少し離れたところで大声をあげながら右手と右足で勢いをつけるやり方であり、若い勢子に多く見られた。他方は、右手を牛の

肩のところに、左手を牛の耳の後ろあたりにそえ、牛にぴったりと付いた格好で、「ハイハイハイ」などと呼びかけながら攻めのタイミングをはかるやり方で、こちらは、そのほとんどが 50〜60 代の勢子である。しかし、奄美や沖縄から横向きの角を持つ牛が多くなると、勢子も牛に近づくことを恐れて、牛に触れない前者のパターンを採るようになったという。

牛と人の移動と交流ネットワーク

徳之島では、昔の闘牛牛は島内産が多く占めていたが、最近は十島村、沖縄、八重山、隠岐島、新潟、岩手、宇和島など日本各地から導入している。また、従来のように新潟経由ではなく直接岩手県に行って仕入れてきたり、軽米町や山形村などによく見に行ったりするという話がある一方で、牛主でもある島民男性によれば、徳之島の闘牛牛の多くは八重山牛だという話もある。また徳之島と沖縄本島を頻繁に往復する牛・牛主・勢子なども珍しくないという。

沖縄では、取り組み表に産地が明記されているものの中で、1 トンを超えるような横綱クラスの大型牛は、岩手産が目立っていたがが、全体的には徳之島産の牛の比率が多く、沖縄本島産・与那国産は 1 頭ずつであった。さらに特徴的なことは、徳之島の勝利牛を沖縄にトレードしてきた例が多く見られたことである。ここから徳之島と沖縄とのあいだには頻繁な交流が存在していることが予想される。

宇和島では、徳之島からスカウトされてきた勢子の事例紹介など地域を越えた闘牛を巡る社会的ネットワークの存在が示唆されている。また、宇和島の闘牛牛の交流ネットワークについてみれば、沖縄（本島・八重山）産や徳之島産の牛が多く認められたが、中には隠岐産の牛も存在した。宇和島は牛の産地ではないため、当初は対岸の大分（玖珠郡・大野郡）や熊本から農耕牛を買い付けて、その中から闘牛牛を育てたという話しもある。

しかし、沖縄、徳之島、宇和島の 3 つの闘牛開催地の間の牛のトレード関係、およびその 3 つの闘牛開催地と闘牛牛の産地および供給地との関係についての事実関係は現時点ではまだ十分に解明されていない。今後、牛の移動の実態や産地と闘牛開催地の交流ネットワークを解明するためには、これら闘牛開催地における闘牛牛の正確な産地情報についての詳しい調査が必要であろう。

ここで宇和島における闘牛牛と人の交流に関する歴史を回顧すれば、1962〜63（昭和 37〜38）年ごろから隠岐との間に頻繁な牛と人の交流があり、昭和 40 年代の取り組み表には「原子力」「沖嵐」「国鉾」などの隠岐の牛の名前が登場していたという。隠岐の牛の特徴は、性格が短気で速戦型に向いており、それまで宇和島闘牛の中心であった九州牛が持久型であったのとは対照的である。隠岐の

闘牛では、勝った牛の背中に次々に人が飛び乗ることが多くあるそうで、その結果、勝ち続けた牛の中には、人間を恐れて人間嫌いになる牛も現れるという。そのような場合、勢子をつけないことにつながる。

宇和島と沖縄との交流は、沖縄の本土復帰以前の 1952～53（昭和 27～28）年に、沖縄から牛の買い付けにやってきて、沖縄に連れて行かれて活躍した「一力」という牛の話しなどが知られている。近年では逆に、沖縄本島産や八重山産の牛が宇和島の闘牛に数多く出場している。

また、宇和島と徳之島との交流は兵庫の西宮経由で徳之島の牛を買ったことがきっかけで、「奄美」という名で戦っていたことが昭和 40 年代の取り組み表に見られる［愛媛県教育委員会文化財保護課 2002: 98］。新潟の旧山古志村（現長岡市）近辺との交流が最も古く、1876（明治 9）年から双方の牛を博労が東京に連れていき「興行」として戦わせていたという。また、1913（大正 2）年には両国の旧国技館で 5 日間の興行があり、現愛南町の「小幡牛」が新潟牛に勝ったという新聞記事が存在する。現在は闘牛がおこなわれなくなっている八丈島とも 1965（昭和 40）年から交流がはじまり、交換トレードしてきた牛が「八丈島」という名で活躍したという。また、一時期は岩手の牛も買っていたが、大会でほとんど取り組みをしなかった。

このように、他地域との牛の交流によって、宇和島にはがんらいの九州牛以外の牛が多く登場し、宇和島の闘牛に変化をもたらしている。それは、牛の入場、土俵入り、勢子のスタイルの変化などに表れている。従って、牛の交流が人の交流を促し、他地域の闘牛文化が流入し、もともとの宇和島の闘牛のあり方に大きな影響を与える結果となっている。

牛と人の国際交流

徳之島では闘牛開催地同士の交流が活発になり、闘牛の国際化も進みつつある。2005 年 5 月 3 日午前、伊仙町の伊仙闘牛場で「第 8 回全国闘牛サミット記念闘牛大会」が開催され、徳之島内外から約 5000 人の闘牛ファンが参加した。鹿児島県知事、伊仙町町長、徳之島闘牛連合会会長、韓国清道郡の議会議長などが挨拶した。また、徳之島と国内の他の地域との闘牛交流を示す一例として、新潟県中越地震で被災した旧山古志村（現長岡市）から徳之島に引き取られた闘牛が花形戦に新潟代表として登場した。

また、同日開催された第 8 回全国闘牛サミット（主催・徳之島闘牛連合会）には、全国の闘牛文化を守り続けてきた 5 県 7 市町村の首長や闘牛団体の代表者、韓国からも 11 名が参加、全国の闘牛開催地同士のネットワークを構築し交流を深めるとともに、国外にも闘牛の魅力を発信していくことを確認し、闘牛文化を

地域資源として活用していくことなどが話し合われた。韓国との交流は 1999 年に和牛 3 頭を韓国へ 2 年続けて送り、韓国の赤牛と対戦させたことに始まる。日韓戦と銘打ったおかげで、プサン近くにある知名度の低かったその地の闘牛場は、総計数十万もの観客を集めるほどの大イベントが開催できたとのことであった。

このように、今や闘牛は国境を超えて、民間主導で国際交流の促進にも大きく貢献しつつある。とりわけ、日韓両国のあいだでは、政治的相互理解が停滞するなかで、日本の周辺部においては、闘牛を介して草の根の交流と相互理解が中央政治の頭越しに進んでいる現状がそこにある。換言すれば、日韓の間でも、あるいは国内においても、我々普通の人の多くが、その事実の存在さえあずかり知らないところで、これまで長年に渡って闘牛文化を育んできた人たちが、闘牛を介して、ユニークな草の根の交流ネットワークを形成し、人とモノと情報の行き交う度合いが年々増しているという確かな現実が存在しているのである。

むすびにかえて

これまでの研究においては、それぞれの地域に「点」として存在しているようにしか見えなかった闘牛が、以上のような時間的推移を視野に入れた比較の作業によって、実はそういった点と点とが人や牛や情報の交流を通して「線」として動態的につながっており、さらには、全体としては「面」あるいは「網」状のネットワークとしてとらえられるような闘牛文化として浮かび上がってきた。このように動態的な闘牛文化のネットワークの存在を浮き彫りにすることには、大きく２つの意義があると言える。

ひとつには、東アジア世界に遍在していたであろう「失われた闘牛文化圏」に対する視野が開かれることである。日本国内に限ってみても、数箇所でしか行われていないため、それ以外のどのぐらいの範囲でかつて闘牛が行われていたのかを把握することは、特に文献史料に登場することが少ないような民俗慣行であるのできわめて困難である。しかし、スペインの闘牛のように「人と牛の競技」ではなく、「牛同士の競技」が日本各地や韓国の全羅南道、あるいは中国（特に西南中国の少数民族地域）という東アジアの特定地域に偏在していることをひとつの問題系として考える手がかりが得られたことになる。

もうひとつの意義は、より今日的なものである。すなわち、日本国内において、現在闘牛が行われている地域は、主に、近現代日本の近代化・都市化傾向のなかで、むしろ離島・僻地・農村といった後進的・周辺的性格を有してきた地域であった。そのような地域同士が人や牛や情報の交流を行い、ひいては全国闘牛サミットのように交流の新たな展開を見せていることは、単純に先進的な都市と後進

的な僻地というコントラストのみを視野に入れた「中央―周辺」的な二項対立図式では理解できない、むしろ「周辺―周辺」系の社会関係の存在意義を暗示するという意味で、今日的な特徴であるといえる。さらに、本論中では言及することはできなかったが、闘牛開催地の中にはインターネットを通じた情報発信を行っているところもあり、情報化時代における地域文化のあり方を考える上でも示唆的な例となっていると言えよう。

註

1. 正しくは、鹿児島大学平成 17 年度教育研究活性化経費による「南北連続『新・道の島々』センサーゾーン拠点形成～地球温暖化学際研究前進拠点と国際・地域貢献～」という学際的な調査研究プロジェクトである。
2. 南日本新聞 2005 年 5 月 4 日。
3. 現在東アジアでは、徳之島、沖縄本島、八重山諸島、宇和島、隠岐、新潟（長岡市・小千谷市）、岩手（山形村）、韓国全羅南道、中国貴州省、中国江蘇省で闘牛が行われており、1988 年 9 月までは八丈島でも闘牛が行われていた。

参考文献

愛媛県教育委員会文化財保護課（編）
2002　『南予地方の牛の突きあい習俗調査報告書』愛媛県歴史文化博物館。

尾崎孝宏・桑原季雄・西村明
2006　「東アジア沿海地域における闘牛をめぐるネットワーク形成の現状」『鹿児島大学法文学部紀要　人文科学論集』63：31-58。

小林照幸　1997　『闘牛の島』新潮社。

山田直巳　2004　「闘牛の社会経済的考察：徳之島社会研究への予備的アプローチ」『民俗学研究所紀要』28:193-217。

新聞記事

南日本新聞 2005 年 5 月 4 日